

平清盛と神戸

神戸史談会会長 加藤隆

久

古来「神戸」は、平家に特別な感情を抱いて来ました。「おごれる平家」と蔑まれ、世間では源平いずれかというところ、源氏が「善玉」、平家は「悪玉」というのが通り相場となつてい

中で、神戸市民の大多数は平家一門に深い愛着を抱いているようであり、神戸市役所が大正十四年(一九二五)に発行しました神戸市民読本には、「平清盛の不忠不義な点はどこまでも鼓を鳴らして攻めなければならぬ。しかし彼が先見の明に富み、勇断進取にしてあくまでも積極的に物事をやりとおすという点については、大いに吾人の学ばなければならぬところである。何といつても平清盛は、神戸市の発展の歴史と切り離せない大人物であつた。」と記しているのがあります。

平清盛は、一一六九年の三月ごろから神戸にずっと住んでいて、十一年間はほとんど神戸の福原で暮らしていたということです。その間では自分の息子達が貴族社会の中で頑張つていたので、本人自身は神戸に住んでおりました。そして必要なとき、都に出て行つていまして、それは十一年の間に二十回くらいであつたといひます。それも都に行つて用件を済ますと、すぐ神戸に帰つて来ました。したがつて、清盛は本籍は京都にあつたが、住民票は神戸にあつたといえるのではないのでしょうか。単に神戸と関係が深いというのではなく、実際に神戸に十年以上住んでいました。これが大変重要な点であり、その中で、現在の兵庫港、神戸港の一番西の辺りにあつた大輪田泊と称する港を大いに整備して、平安版ポートアイランドともいふべき経ヶ島に人工島を作りました。

この点においても現在の神戸市の先駆者であり、先を行つていたことになりました。ここに中国の船を迎え入れて貿易をすすめようとした。そういう意味では、先進的・開明的な人物であつたといえましょう。当時、外国船は九州の博多止まりで、瀬戸内海に入つてくることは認められておりませんでした。したがつてこれは相当な抵抗を排除して実現させたということになります。

更に、一一八〇年の六月からこの地に新しい都造りを始めました。実際には約七十日間であり、後白河法皇・高倉上皇・安徳天皇が百七十日間居られたという事になります。平安京は四百年続いた都でありますからその四百年も続いた都を遷すという事は、想像を絶する大変な事業だつたと思ひます。当時の普通の貴族や政治の担当者ではとても思ひつかない事を思ひ切つて行おうとしました。

当然そこには反対もありました。その都造りの最中に頼朝が伊豆で挙兵をしたり、木曾義仲が信濃で挙兵したりします。そして瞬く間に全国的な内乱に発展していきます。やむなく、平清盛は京都に戻りますが、実際に神戸の福原に都遷しを行おうとしました。抵抗を排して都遷しを行おうとした点は洵に重要な点であります。

そして終わりに、一旦都落ちをした平家が勢力を盛り返して、都を奪い返そうとして、この神戸の地に陣を敷いているところを源範頼と義経の軍によつて破られたということ。平家の軍力は、この一の谷・鶴越の戦いで、その中核部分が壊滅してしまひます。そしてそれによつて、平家のその後の運命が決まつてしまひます。一の谷・鶴越の戦いの直前にもう一度都を奪い返すことが既定の事実のように思われていた平家ですが、残念ながら、一の谷で大敗する事によつて、滅亡が決定づけられてしまひました。

そういう意味で、平清盛や平家にとつては日本に於ける京都に並ぶ、いや京都以上にこの地は重要な土地であつたであらうと思ひます。

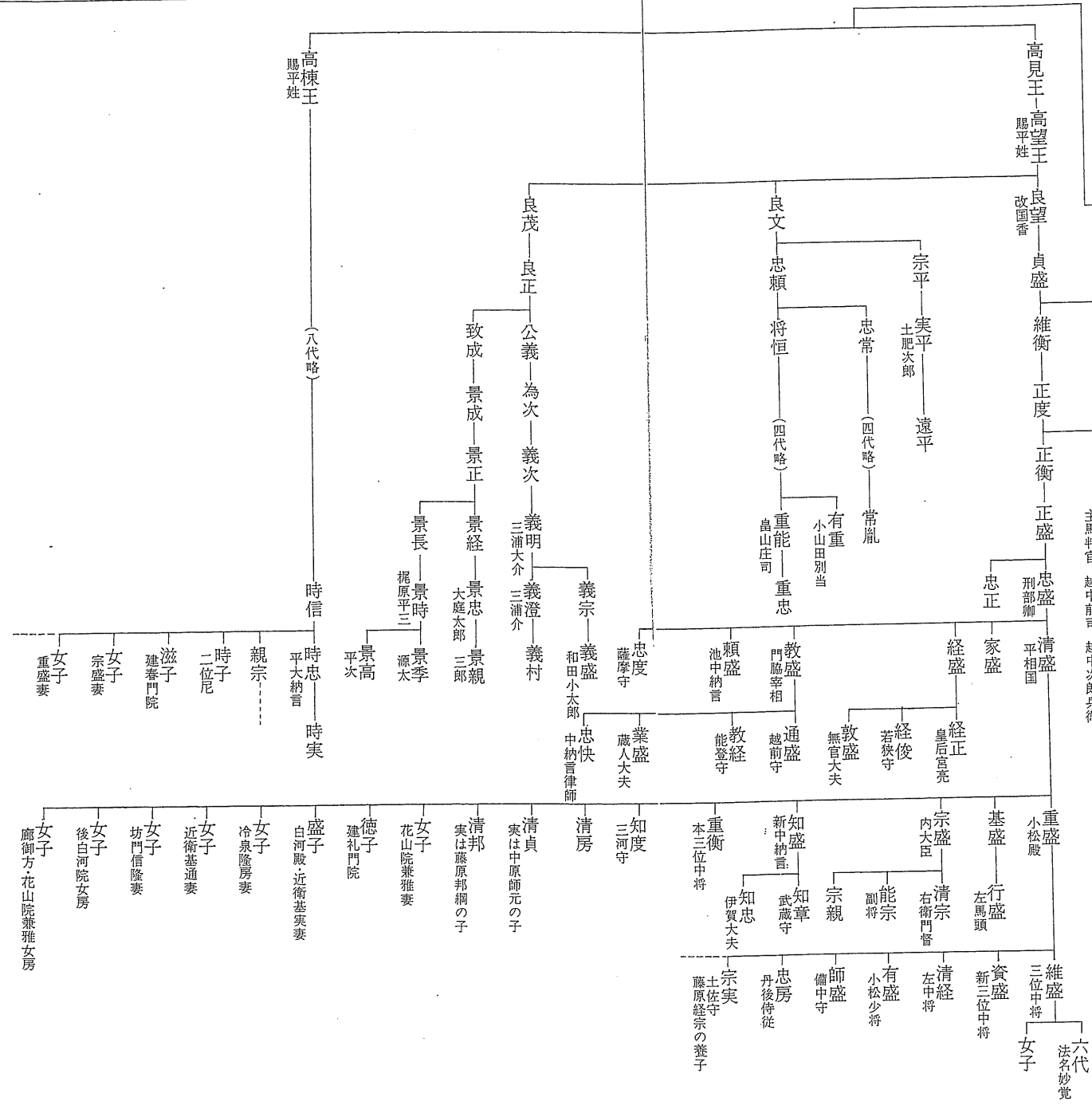
かくのごとく、平清盛の、神戸の地に新たな都を造つて東アジアに開けた海洋国家を構築しようとした壮大な試みは見るべきものがあつた、特に日宋貿易を行おうと考えて経ヶ島を開削したという構想は、まさに平安版ポートアイランドであつたといえるでしょう。

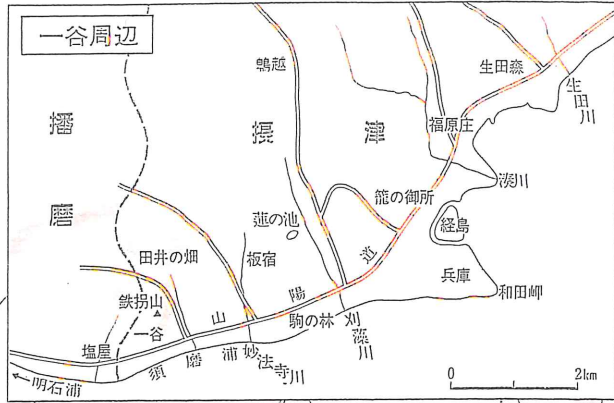
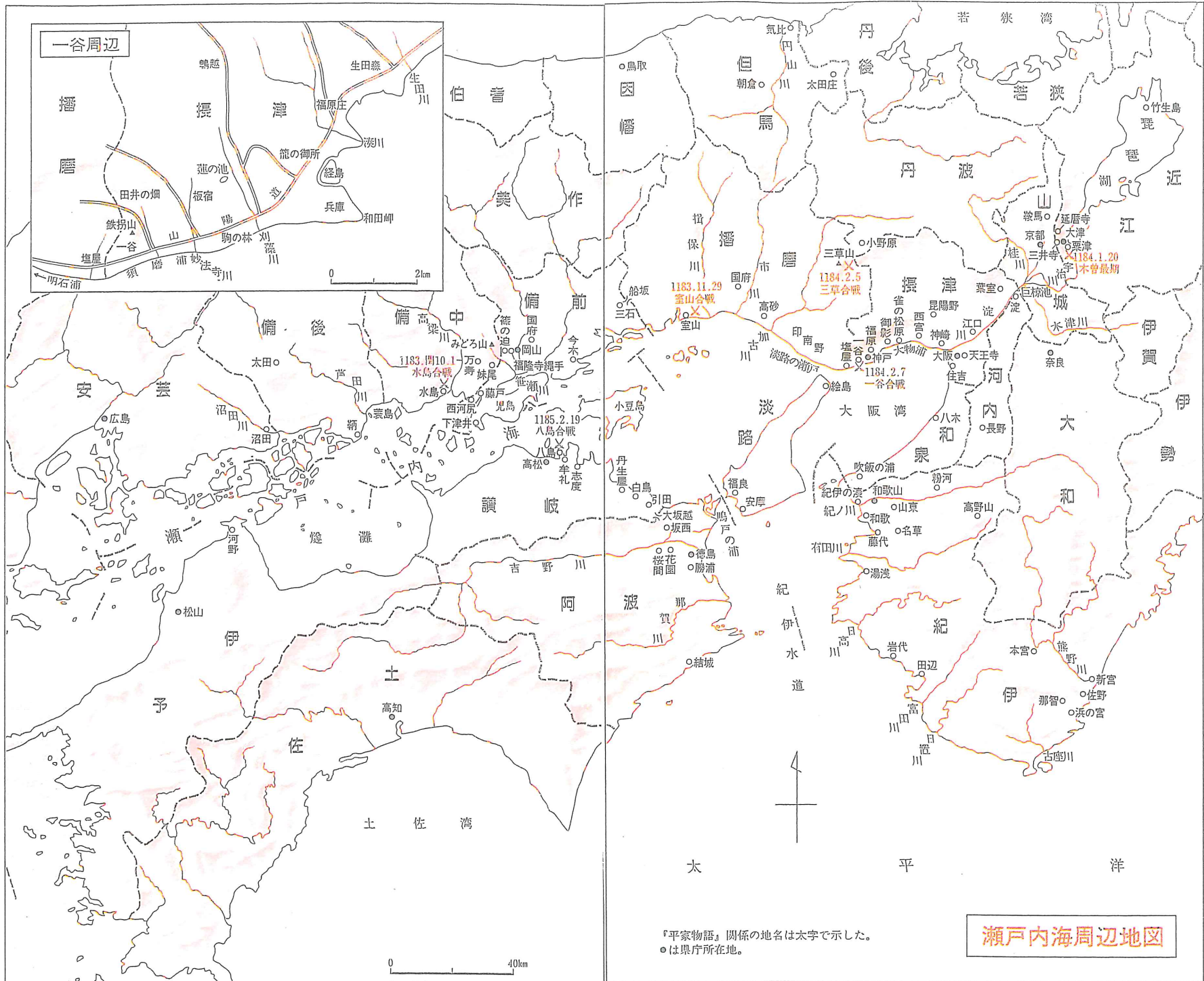
神戸市では、かつて神戸の街づくりの先駆者ともいえる平清盛を顕彰すると共に源氏平家にゆかりの遺蹟を記念し、そこに碑を建てたり、関係資料を展示したりして、歴史や伝承、伝説までも大切に保存して来ました。

平氏系図

主として、『源氏分脈』による。小活字は『平家物語』中のおもな呼称。諸家系図によれば、たとえは三浦氏や平家貞などには異伝がある。

桓武天皇—葛原親王





『平家物語』関係の地名は太字で示した。
 ○は県庁所在地。

瀬戸内海周辺地図

- 1118年（元永元年） 1歳 出生。平忠盛に育てられる。
この年、佐藤義清（のちの西行）も生まれる。
- 1120年（保安元年） 3歳 母死去。
- 1127年（大治2年） 雅仁皇子（のちの後白河）生まれる。
- 1129年（大治4年） 12歳 従五位下に任ぜられる。
- 1132年（長承元年） 15歳 父・忠盛が武士として初めて内昇殿を許される。
- 1135年（保延元年） 18歳 父・忠盛の海賊討伐を受けて従四位下を授かる。
- 1138年（保延4年） 21歳 これ以前、高階基章の女と結婚するが死別。
その後、平時子と再婚する。
- 1140年（保延6年） 佐藤義清、出家。のちに西行と名乗る。
- 1146年（久安2年） 29歳 安芸守になり、瀬戸内の制海権を得る。
- 1147年（久安3年） 30歳 祇園社で乱闘事件を起こす。
- 1153年（仁平3年） 36歳 父・忠盛死去。平家の棟梁を継ぐ。
- 1155年（久寿2年） 近衛天皇崩御により、後白河天皇即位。崇徳上皇との対立深まる
- 1156年（保元元年） 39歳 保元の乱。後白河天皇側につき、源為義らを討つ。
勲功賞で播磨守となる。
- 1159年（平治元年） 42歳 平治の乱。源義朝と戦い勝利。武士の王となる。
- 1160年（永暦元年） 43歳 義朝の子・頼朝、伊豆に流される。
- 1161年（応保元年） 44歳 二条天皇の親政を支え、中納言に任ぜられる。
妻の妹・滋子が後白河に嫁ぎ、皇子（高倉天皇）を生む。
- 1165年（永万元年） 48歳 二条天皇の崩御に伴い、後白河法皇の院政始まる。
- 1167年（仁安2年） 50歳 太政大臣となるが、わずか3か月で辞任。
- 1168年（仁安3年） 51歳 熱病を患い、生死の境をさまよう。出家する。
この頃、厳島神社を大規模に造営する。
- 1169年（仁安4年） 52歳 福原（現・神戸）に別荘を構え、以後ここを住まいとす。
念願の日宋貿易に専念する。
- 1170年（嘉応2年） 53歳 後白河を福原に迎え、中国・宋の特使と面会する。
- 1177年（治承元年） 60歳 鹿ヶ谷事件。平家排除を狙う院近臣を一掃し、後白河との対立深まる。
- 1179年（治承3年） 62歳 長男・重盛死去。これに乗じて、後白河が自らの支配を強めると清盛は
クーデターを起こして、後白河を幽閉、院政を停止する。
- 1180年（治承4年） 63歳 以仁王（後白河の子）の挙兵を未然に鎮圧。
京から福原への遷都を強行する。しかし6か月で還都する。
頼朝が挙兵。富士川の戦いで平家軍大敗。
- 1181年（治承5年） 64歳 熱病に倒れ死去。
- 1183年（寿永2年） 木曾義仲の攻勢により、平家は都を落ちる。
- 1185年（元暦2年） 壇ノ浦の戦いで平家軍、滅亡。